

心のメタファと身体性

ー認知心理学の立場からー

楠 見 孝 (京都大学大学院教育学研究科)

0. はじめに

本発表では、心を生み出す身体のはたらきとして、認知心理学の立場から、心に関わる身体言語表現、とくにメタファを取り上げる。そして、身体に関わる感覚・運動情報が自らの心の状態（とくに感情）の認知やその言語表現にどのように影響するのかを、認知言語学や身体化認知の考え方に基いて検討する。身体感覚や感情の言語表現は、(解釈、記憶などの)個人内伝達と(会話、作文などの)個人間伝達を支えている(楠見, 1996)。ここでは、感情経験と感情言語の生成を支える階層(e.g., Leventhal, 1991)として、(1)感覚・運動レベル、(2)スキーマレベル、(3)概念レベルを想定し、その身体的基盤を検討する(楠見・米田, 2007)。

1. 感覚・運動レベル：感覚語、擬態語、慣用句

感覚語 感覚・運動情報は、感覚器から入力されて、快・不快などの評価を経て言語表現がされる。ここで、感覚経験の語彙である感覚語(軽い・重い、柔らかい・堅い、暖かい・冷たいなど)は、固有の感覚領域だけでなく、気分や感情、記憶、性格の表現にも用いられる(例：重い気分、暖かい性格)。こうした共感覚的な転用やメタファが可能な理由は、感覚語の意味空間における基本次元(快・不快、強・弱)は感情や性格などの次元と同型の構造を持っているためである(楠見, 1988)。

擬態語 身体経験に基づく感覚と感情を表現する擬態語(オノマトペ、音喩)は、言語伝達において副詞として動詞を修飾して、情感のこもった表現をしたり、行動の微妙な調整を可能にする。オノマトペの起源は、つぎの2つに大きくわかれる。すなわち、(a)心拍、息などの身体的変化の音響を言語音に移した擬声語に近い擬態語(例：どきどき、どきっ、ほっと)、(b)心理状態を言語音によって象徴的に表現した語音象徴に近い擬態語(例：うきうき、むらむら、かっか)。擬態語のニュアンスは、語音象徴に支えられている。たとえば、「ひゅっ」「どきっ」「かっ」といった1モーラ(拍)の促音は、「速さ」「短さ」「急な終わり方」という象徴的意味を示している。したがって、書き手は、擬態語を使うことによって、身体的感覚に基づく心理的变化を生き生きと表現でき、いっぽう読み手は、

擬態語が表現する音や動作を通して、臨場感をもって身体感覚の追体験ができる(田守, 2002)。

身体慣用句 感情に関する慣用句には、表情・身体部位の変化に基づくものが多い。それは大きく2つに分けることができる。(a)表情、身体・姿勢(部分)の記述で、感情(全体)を示す(例：手がわななく→悲しみ)、(b)表情、身体・姿勢の変化(結果)で、感情(原因)を示す(例：息をのむ→驚く)。これらは、部分・全体の空間的隣接性と原因・結果の時間的隣接性に基づく換喩である(Lakoff & Kövecses, 1987)。

楠見(1996)は、用例を収集して分析したところ、感情の身体慣用句の用例数は、顔(例：目、鼻、口)がもっとも多く、姿勢(例：手、足、腰)は少ない。その理由は、顔の表情の変化が、感情の微妙な変化をもっとも表現しやすく、認知しやすいためと考える。一方、姿勢や身体部位の変化は、感情の強度がある程度大きく、急激な変化や、持続的状態でないことを認知しにくい。身体部位の変化には、「息をのむ」(驚き)、「身の毛もよだつ」(恐怖)などがある。姿勢の変化には、「肩を落とす」(落胆)、「腹の皮をよじる」(笑い)がある。これらの表現の起源は、身体部位/姿勢の変化を描写したものが、比喩的に誇張して使われている。

2. スキーマレベル：イメージスキーマに基づく比喩

第2のスキーマのレベルにおける感情の言語表現は、第1のレベルによる知覚・運動的入力や生理的喚起によって形成された表象がイメージスキーマとして抽象化され、言語化されたものである。認知言語学者たちは、異なる文化の感情の比喩表現、慣用句を分析し、それらには文化や言語の差異を越えた共通性があることを指摘している。

イメージスキーマによる感情比喩 感情に関わる感覚・運動入力は、反復によって抽象的なパターンやスキーマが形成される。たとえば、怒りは、体内の圧力(血圧、筋圧)の増大、体温の上昇や顔の紅潮などの生理的变化と、限界点を越えると正常な機能が損なわれたり、コントロールの試みに失敗したりすると行動が現れる。これらに基づいて、「怒り」には「熱くなる(get hot)」、爆発(explode)、切れる(burst a blood vessel)等の比喩表現が用いられる。こうした表現は、英語、ハンガリー語、中国語、日本語に共通している

(Kövecses, 2005)。その理由は、感情に対応した身体的経験、とくに生理的経験(たとえば、血圧や心拍の上昇)に基づいて身体化された文化普遍的イメージスキーマがあり、それが言語表現を支えているためと考えられる(Gibbs, 2006)。またこうした表現はバラバラにあるのではなく、体系性を持っていて、こうした変化パターンが、統合してイメージ化されている。すなわち、「怒り」は「心の容器」イメージスキーマにおける液体の沸騰、「垂直性」スキーマにおける液体の水位の上昇、「コントロール」と「バランス」スキーマによる心のバランスのコントロール、そして、コントロール不能になり爆発するといったイメージスキーマがある。これらは、身体感覚領域の変化(例: 体温や血圧の上昇)へ、物理領域の変化(例: 温度や圧力の上昇)をマッピングすることによって支えられている。このことが感情の領域に体系的な構造を与え、一貫した比喩表現を生成する(Lakoff, 1987)。

こうした感情の言語表現を支えるイメージスキーマを明らかにするために、4つの基本感情「怒り、喜び、悲しみ、幸福」について、112名の大学生にイメージ画を描かせて分析した。その結果、たとえば、怒りに関しては、「爆発」(35%)を表すイメージが描かれ、全体の21%が上昇のイメージが描かれていた。一方、「悲しみ」は「落下」(14%)、「沈む」(10%)を表すイメージが描かれ、全体の45%が下降のイメージで描かれていた(楠見, 1993)。こうした結果はEdwards(1986)の米国データと対応している。こうしたイメージ画が、文化を越えて共通性をもつことは、普遍的な身体感覚運動的表象をベースにしたイメージスキーマが、感情の言語表現を支えているためと考える。ここで、イメージスキーマとは、知覚・運動的なパタンの反復経験を抽象化した、空間関係や動きに関する力動的なアナログ表象であり、容器と内・外、上・下、バランス、コントロールなどがある(Johnson, 1987; Lakoff, 1987)。

内臓慣用語 自分自身の内的、生理的变化は、直接的に敏感に認知できるが、他者のそれは認知できない。私たちは、感情の働く場や源として、身体の奥にある内臓(胸、腹、肝など)をとらえ、その変化で感情を表現し説明している。感情の身体慣用語の用例数は、顔のつきに内臓(例: 胸、腹、肝)に関わるものが多い(楠見, 1996)。

内臓では「胸」に関する用例がもっとも多い理由は、感情喚起による心拍変化が容易に自己認知できるためである。したがって、昔から「心」の座としてとらえられ、様々な種類の感情表現に使われている。ここで、「胸」は前述の「心の容器」というイメージスキーマ

でとらえられ、その中の感情という「液体」が「騒ぐ」「不安」「あふれる」「喜び」などの表現がある。また、「心の容器」を「固体」ととらえて、「締め付ける」「裂く」「潰れる」「悲しみ」という表現もある。これらは、身体的痛みの身体容器表現(例: 締め付けられる、裂けるような痛み)と共通する(楠見・中本・子安, 2010)。

「腹」は怒りの座であり、癪癪を起こす「虫」がいて「腹の虫がおさまらない」「腹に据えかねる」などの「怒り」の表現が多い。また、「堪忍袋の緒が切れる」という表現は、「堪忍袋」が「心の容器」のイメージスキーマに対応し、怒りが蓄積することによって、袋が一杯になり圧力が増して、怒りの抑制ができなくなることを「緒が切れる」と表現している。また、「頭」にかかわる「頭に血が上る」「頭から湯気が出る」「頭」に来る」といった表現は、「怒り」に伴う血圧の上昇に対応している。怒りは、「腹」から「胸」そして、最後に「頭」にくる(Matsuki, 1995)と考えられる。

3. 概念レベル：スクリプトと心の素人理論

感情言語の理解や産出は、感情生起や統制のスクリプトに支えられている。これは、感情に関わる理解や表出行動を支えている知識(規範や規則を含む)でもある(Lakoff, 1987)。たとえば、怒りのスクリプトは5段階[出来事→怒り→制御の試み→失敗→表出と均衡回復]で表現できる。ここで、文化的普遍性が高いものは、感情の生理的反応パターンである。文化的差異が高いものは、感情を引き起こす出来事、制御・報復(表出規則、規範)がある。たとえば、表出の身体的制御表現(怒りを押し殺す、喜びをかみしめる)はこれに当たる。こうしたスクリプトは、イメージスキーマとあわせて、自他の感情理解を支える心の素人理論(folk theory)の一部を構成する。

4. 結論：心の言語表現を生み出す身体のはたらき

心に関わる感情の言語表現を、身体感覚や運動レベルの入力を基盤に、イメージスキーマの表象レベル、概念のレベルの3つに対応させて説明した。すなわち、身体からの感覚・運動情報の入力には、生理学的制約が働き、さらに、表象の形成過程や言語表現過程には社会文化的制約が働いている。このように身体の生得的制約と社会文化的制約による相互構成的過程によって、身体感覚を起源とする心に関する言語やメタファ的概念体系が形成されていると考える。

主な文献

楠見 孝・米田英嗣 (2007). 感情と言語 藤田和生 (編) 感情科学の展望 京都大学学術出版会 pp.55-84.